

佐伯尋常高等小学校の沿革

(その三) 明治年間 (下)

賛助会員 山内 武 麟

(佐伯市山手区)

各学級の色帽子

運動に注意をつけ、景気を加へるために、各学級によつて色帽子を制定してある。

尋常科三年は赤

尋常科四年は桃色

尋常科五年は青

尋常科六年は黄

高等科は白

色帽子は二枚合せに作つてあつて、表の方は各学級の色別けとして、裏の方は其の学級の一組とか四組とかの組分けによつて青とか赤とかをつけてある。序に教師方の運動帽も一定してある。

運動状況一斑

運動と操行

次に、これは野村先生の記されたものかどうかはつきりしないが、「運動状況一斑」と題してこの当時に於ける佐伯校の運動状況を書かれたものがある。その全文を記してみよう。(原文のまま)

私ハ学校は飽くまで体育を尊重し、運動を奨励しつゝある。劣等生も一面からは運動によつて救済すると云ふ方針を取つて居れど、品性ノ余り面白からぬ様子を児童も、運動によつて気質と変更してやり、存分に訓練すると云ふ方針である。それ故私の学校では如何に品行はよく、学校の成績は優秀であつても、運動に於ける様子は操行点を甲をつけぬ。總ての徳目を善行だと奨励して居るのである。

運動とシーズン

暑いとか、寒いとかによつて、運動の種類も変へねばならぬ。例へば暑い時には水鉄砲をつかせたり、水泳をやらせたりするが、寒い時にはフットボールと蹴らせたり、綱引きをさせたりする様に大体に於て運動をシーズンによつて分けてある。

十五分間の遊戯時間

うっかりして居ると忘れがちになるのは十五分間の遊戯時間である。此の時間を遊ばせて置かぬと、次の時間の授業が甘く行かぬ様である。それ故私の学校では授業の止む鐘がなると、どの様な授業でも早速止むると云ふ様に励行している。尤もこれは外に尚目的もあるのであるが、遊戯時間には少くとも全職員は三分の一は必ず運動場に出で、児童の運動を指導し、兼ねて看護の任に當つて居る。

放課後の運動

然し私の学校に於て、本當なマジメな運動をやらせるのは放課後の運動である。別に正科となつて居る訳でもないが、出席迄を取つて其々突然と正科の様になつて居る。此の時は児童は悉く運動姿に身と固め、その学級の先生と一緒になつて各種の運動に取掛るの

である。

### 野 球

野球は男子の運動の中心になつてゐる。尋常科の二年位からボツボツ始めるが正式な運動場ではる程になるのは六年からである。普通月曜から土曜まで六日間を三分して、それを六年と高専科の一二年とに二日づつ分配して居る。

### 度 球

これは女子部に取つての運動の中心である。正式に始めるのは五年以上であるが、コートは立派なものが三つ許りある。

### ランニング

男子部ではランニングは殆んど一年中通しにやるが、然し三、四、五月の春と十、十一月の秋とは最も盛んである。四年以上は毎日どこにか駆け出して行くが、雨が降つても駆けやる事は再々ある。高専科の児童のレコードを一寸記して見よう。

- 短距離 十七町 五十分十秒
- 三哩半 一時間十分

然し普通は余り個人的の徒競走はやらせない。

### 角 力

角力も中々盛んである。これ迄は草原や運動場の石の無い所に白墨で輪をかいて取らせてゐたが、今では立派な本式の土俵が出来ている。時に且広い広い草原に連れて行って取らせることもある。高学年になると仲々手筈へのするのが出て来る。

### フットボール

是日正に寒い時の遊戯であるが、十一月頃から三月頃まで最も盛んである。然しこのフットボールは四五回もするフットボールではなくて、手製のフットボールである。ゴムマリの上を締めて包んで其の上から糸をまき、糸をかけて出来るのである。これが一級に二つ三つ位宛出来るから、十も十五もあちらに飛ぶこちらに転がって、中々盛んである。この遊戯は過激でなく、然も皆が跳び歩くので、冬などの運動としては最もよい様である。

### 帽子取り

### 水 鉄 砲

### テザボール

### 棒 倒 遊 戯

棒倒しと云ふのは一隊と兩軍に分けて置いて、各位に二間程ある棒を立てさせるのである。競技が始まると、兩軍共一部は棒を守り一部は敵の棒を倒しに行くのである。そこでどちうでも早く敵の棒を倒した方が勝である。此の遊戯は勝負をきいたにするために、棒の上に小さい旗を立ててそれを落とされたら、負とするのが良い様だ。

### 灰 粉 打 ち

これは新調款で長さ二寸位の丸い袋を作り其中に砂を入れて、糸で両口を結ぶのである。それを背中に担うのである。それからそれを打破るたき棒を作る。中には藁を入れたそれには赤か黄か袋をかぶせるのである。扱て道具が揃ふと、一隊を兩軍に分けてそれに色つきの

たたき棒を持たせる。たたき棒と同じ色の帽子を冠くせる。それから砂袋を背中に担ふ。両軍とも一人の大將を選定して、これに反色たすきをかけさせる。それが戦闘は開始されるのであるが、どちらでも早く大将を打ち取った方が勝になるのである。

戦闘中自分の袋を打ち破られた時は戦死者であるからその場に倒れる規定になつて居る。此の遊戯は頭も使ふが仲々壯快な遊戯である。

### 振武 競走

これはカンツリーを真似たのであるが仲々愉快である。例へば一同を整列させて置いて、「今日は何処を通りどこに出てどこを経て帰れ」という風に云ふのである。或時は山を越え或時は河を渡らねばならぬ。非常に児童の好む遊戯である。

### キヤツキボール(捕球)

これは十五分の遊戯時間等に最も良い様である。ボールはすげまりである。これは野球入下地を作らせる為にも非常に効力がある様に思はれる。

### 器械体操

木馬

遊動馬

ブランコ

廻りブランコ

平行棒

尚数へ立てれば幾つもあるであらうが、随分盛んな様にかへられる。然し全児童を活動させる為には、

まだ、運動の種類に於ても満足は出来ない様である。吾々は絶えず色々考へて居る。児童は野球や蹴球の様を一年中やつても飽かぬ遊戯もあるが大抵は永續きかない。即ちあるシーズンによつて色々と変へて行かねばならぬ。要するにまだ、研究の余地は十分にある様である。

### 運動の止め鐘

放課後一時間すると第一のやめ鐘がなる。それより三十分すると第二の運動やめ鐘が鳴る。野球と蹴球とが、第二の鐘でやめ、其の他は運動は第一の鐘で止めることになつて居る。児童はそれから身体をふいふ左り足を洗つたりして一と先づ家に帰り行くのである。これで今迄狭く騒がかった運動場も俄かに広く広く静かに静かになつて行く。

以上記した「鶴の羽風」及び「運動状況一班」と讀んで解るやうに、野村越三先生の運動に対する崇高な精神と、運動の指導に如何にか熱心であつたかその献身的態度にはただ頭の下る思いがする。こんな先生が先頭に立られて榮起された佐伯校の体育運動は、「運動王国佐伯」の名に相応しい成果を挙げたのである。佐伯小学校創立六十年記念熱の中に次のような一文がある。

### 朝起会と野村越三先生

明治四十二年の頃故野村越三先生が身を以て範を示す先生の教育方針に基づいて担任の学級に行つたのが始めて終に全校に及んだ。即ち今年九月一日全校の朝起会起る。嚴寒の朝も短夜も夏も厭いなく早晨学校に来り出席簿に記入して帰るのである。石も凍る冬の朝足袋も

はかずに通つたものだ。先生はこれに満足せず冷水摩  
 擦を始められた。更に冷水浴にと漸進した。かくて四  
 十四年十二月学校として冷水浴を開始する事になつた。  
 最初今の小使室の井戸の横に浴槽を設け、夏の河童交  
 姿は今の子供の夢にたにもしない所であらう。しかも  
 それが強制的でなく所謂野村式で先生の後について  
 て喜んで行くのであつた。此時外部の人も冷水浴に見  
 えられていた。先生の令兄斎藤澄氏などが手拭提げて  
 杖庭を通られる姿が彷彿する。此の朝起会は遂に時の  
 同窓会と動かし星章を配した優勝旗が男女各一本宛授  
 与された。船頭町、西谷、内所、山際、中村と出席率  
 の優良な組分之れをとりあう定めになつたので茲に狂  
 烈な爭奪戦が展開された。今の運動競技の爭奪位は其  
 の比でなかつたと記憶する。

野村先生の教育と挙げるなら実に貴いものがある。  
 明治四十年四月から大正二年三月迄前後七ヶ年の在職  
 は我佐伯の教育に一石を投じたものと思ふ。現今叫ば  
 れつゝある作業教育などもこの時実行されていた。  
 部落の生徒に藁を打って米させ昼食の時間辨当を持つ  
 てお涼場に上り草履を作つたりされた。

常に子供と遊びその間に子供の個性を調査し個性尊  
 重の教育とされていた識見にも敬服する。

また運動競技の指導に於てはその当時より一家をな  
 し(鶴の羽風参照)他日南郡として運動王国として県  
 体育界に君臨せしめたるも蓋し先生に負うて少ながら  
 ずと云ふも過言でないと思ふ。

放課後ユニホーム姿で体を少し前こみにし手と後  
 にくみ歸をつき出して運動場の一角に立つ時、小さい  
 ユニホームが慈母になつく乳香子の如くどい教室から

も集つて行くのを見る。しかもそれが決して強制する  
 ものでないという事を知る時、誰かその人格に尊崇の念  
 を禁せざるものがある。

先生の赴くて運動熱起り、生徒の風紀改まると聞く  
 実に佐伯の産める偉大なる教育者というべし。然るに  
 惜しい哉、研究途上に二豎の犯す所となり遽然として  
 逝きしは惜しみに余りあるものである。

先生と敬慕する知友や教え子たちは先生を追慕して  
 胸像を建立した。馬場の緑松を背にし前かがみの安は  
 さながら生けるが如く音等を鞭撻するものかようであ  
 る。

(附記)

野村先生の胸像は大正十四年養賢寺の前に馬場の松の  
 緑と背にして佐伯小学校の方に向つて立てられた。この  
 胸像は佐伯出身の彫刻家片岡角太郎氏の作品であり、台  
 石の裏面には高司正直先生の書かれた碑文があつた。戦  
 時中に金属回収のため壊され胸像はどこかに送られたが  
 幸にも回収の憂目にあわず原形のまま東京在任の先生の  
 令弟阿南衛氏のもとに保管されてあつた。終戦後先生と  
 慕う人達の間には再建しようとする義が起り基金を提出し  
 て昭和三十五年四月に三の丸の現在に所に建てられたの  
 である。

先生と同じ時代に佐伯小学校で教鞭をとられた今泉作  
 治先生は、野村先生のことを次のように書かれています。

私が畏敬する人に故野村越三兄がある。あの羊のよ  
 うな柔和な眼、ほこりにこした童顔、しかも不言実行の  
 人野村兄を思う時、吾々は一種の緊張と敬慕と、何と  
 も知れぬ和やかさとを感ずる。

兄は中学卒業の若い代用教員であつた。しかもその

教育力の及ぶところ児童は勿論、中等高等の学生から町の青年、同僚、先輩にまで、常に「野村君は実に偉い。真の教育者は野村君に初めて見ることに出来る」とまで激賞されていた。実に兄が人々へ無言の感化を見る時、真の教育は言論でなく、虚栄でなく、人みせでなく、黙々たる実行、真の無我愛であることと痛感する。吾人が口に教育の真理を説きながら教化善導の實をあげ得ない弱さを反省する時、兄の偉大を思い、兄の真剣と学び、精進以て教育道への為めに尽したいものである。

野村先生から教えを受け友人達は勿論、先生へ誓ひに接しただけの人達でも、先生に対する追慕の念は今なお深いものである。忘れ得ぬ数々の追想を載せて先生を偲びたいと思うが、他の機会にゆづつて割愛することにする。

### ○中隊教練

明治四十三年頃高妻弘道先生が尋常科四年以上の男子の中隊教練を始めた。時には大隊教練もやった。白いモスリンに赤い布で大隊番号の山形を切抜いた大隊旗を持たせ、高妻大隊長のしおがれ声か城山にこたまし一つの威厳であった。

これよりさき大分県下で中隊教練といえ成西園東郡の桂陽小学校が随分鳴らしたものだ。が、以米桂陽のそれは地に落ち、南の佐伯は教練に於て県下の王座を占めるに至った。佐伯の中隊教練は鳴らしたもので、当時小児童の意気もまた熾んなものであった。

### ○購買部

児童数近年々増加し、児童の学用品の購買力を考慮し、学用品購買部の設置の必要を痛感するようになった。四月十三年四月から購買部を開始することになった。これはいうまでもなく営利とはなれず施設であったが、多少の剰余金を生ずる場合がある。その金は貧困児童の保護資金として備えることにした。開設当時は大賀名八氏が主任として経営した。

この購買部は大賀氏に代つて大崎豊次郎氏が経営し相当長く継続したが、戦時中物資統制によつて経営不可能となつて遂に廢止された。

### ○石川巖治校長転任し、所田延吉校長を迎える

佐伯尋常高等小学校と併合されて黄金時代を作った石川巖治校長は、明治四十四年四月滿洲関東州の大連大坂場小学校長として出向され、しばらく後任校長決まらざらず首席訓導の矢田熊太郎先生が校長代理をしていながら、七月に所田延吉校長を迎え、所田校長は高知県出身の人でそれまで京都府視学をしておられた。

(明治年間あり・次回は大正年代となる)

### 便り

(おことわり) 日向三川内へ幼少の日と過ぎ、後佐伯に務めて、真川高寺、佐伯小学校に在りては、長谷川先生からの便りが便利です。先生にも申しあげ、ここに掲げ、会員の便りに流れていただきます。はかきに頼むと書かれた全文、原文は、(前)

日向三川内から佐伯へ

大阪 長谷川 等

一九七〇、二、三三年前の便りの中に「佐伯史談」が載っていました。前号が迷い子になつてご親切に再送を頂き感謝に存じました。住所以前に詳細に書いたつもりでしたが何かのまちがいで、「松崎新二丁目七三番」